

## <ワークショップ報告>

### ①モデル授業公開検討会(3)：ノートの取り方 第二弾

担当者： 藤田哲也(法政大学)

中川華林(法政大学大学院)

概要： 本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に模擬授業を行い、授業後に参加者の皆様と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換を行った。2016年度に続き、2017年度も「ノートの取り方」をテーマとして取り上げた。「ノートの取り方」は、単なるスタディスキルの一つというより、学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から脱却し、「実際の行動に反映させるべきである」という「気づき」を得るための絶好のテーマである。「ノートの取り方」をマニュアル的に教えるのではなく、初年次教育の意義に気づいてもらえるような工夫を取り入れることが肝要である。本ワークショップの前半で、藤田による模擬授業を行った際には「授業内模擬授業(中川が担当)」を含め、学生が「ノートの取り方を自分で工夫する必要がある」という「気づき」を得るための工夫を実演した。2016年度は「教科書中心」と「板書中心」の授業を題材として取り上げたが、今回は板書中心の授業に代わり「パワポのスライド中心の授業」を取り上げた。ワークショップ後半では、中川の進行により、「ノートの取り方」についての学生の自己評価を適正化するには」と「スライドの多様性」に対応する視点について」という二つの観点を中心に、参加者の皆様と討論を行った。

キーワード： 初年次教育モデル授業、授業検討会、気づき、シラバス

### ②レポートの基本を学ぶ授業

#### —アクティブラーニングによる展開—

担当者： 井下千以子(桜美林大学)

概要： 学生に、論証型のレポートを書かせることを想定し、資料を収集・整理して執筆するまでのプロセスをワークとして実施した。参加者の先生方には、スマホ、タブレット、PCなどインターネットに接続できる機器を持参いただき、テキストとして井下千以子(2017)『思考を鍛える大学での学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』を用い、次の手順で実施した。

1. まず、各々で、Work10の「小学生のケータイ・スマホの利用実態と問題」に関する情報を1~2点調べてもらった。
2. 次に、5~6人のグループで、ケータイを持たせる立場と持たせない立場、それぞれの立場の根拠となる情報を整理してもらった。
3. それぞれの立場と異なる意見の根拠となる情報を整理することによって、批判的に検討することを体験してもらった。

4. その他，指導のツールとなる，基本フォーマット・見本レポート・自己点検評価シート・ワークシートをどう使いこなす，授業を展開していくのかを解説した。
5. 参加者の感想から，調べた資料をどう整理し論理を組み立てていくのか，そのプロセスをいかに主体的に学ばせるのか，アクティブラーニングによる授業の展開を，実際に体験できていたことがわかった。

キーワード : アカデミックライティング，アクティブラーニング，論理的思考，批判的思考

### ③学生の経験を言語化し，学びを深めるライティング指導 —TAE (Thinking At the Edge) をベースにした 「経験をことば化する方法」—

担当者 : 成田秀夫 (河合塾)  
山本啓一 (北陸大学)  
得丸智子 (開智国際大学)

概要 : アクティブラーニングが広がり，学生が発信する機会が増えているが，情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として，学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。このような問題意識のもと，私たちの研究グループは，経験から得た知恵 (身体知，暗黙知) をことばで表現する方法 (「経験のことば化」と呼ぶ) を模索してきた。今回は，哲学者ジェンドリンが創始し，得丸 (2008 他) が表現活動としてデザインした TAE (Thinking At the Edge) をベースに，初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると，次のようになる。

- ・内省を促し，思考力と表現力を一体のものとして高める
- ・経験を相対化し意味づける文章表現へと，段階的・系統的にプロセスをデザインする

・他者との共有や，アカデミック・ライティングへの接続に開かれている  
当日のワークショップでは教員の教授「経験」をふり返って言語化するワークを行った。具体的には「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する (データ化) → 小カードを類似性によりグループにする (グループ化) → グループ内類似性，グループ間関連性を短く表現する (パターン化) → キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する (構造化)」という一連の手順を体験した。

参加者からは，自己の経験を言語化するためにポイントがわかった，キャリア教育やインターンシップのふり返りにも活用できるなどのコメントが寄せられた。

キーワード : TAE，経験の言語化，アカデミック・ライティング

#### ④協同学習に活かす相互評価：学習者と共に作るルーブリック

担当者： 関田一彦(創価大学)

概要： アクティブラーニング講習において、その評価に関する質問は多い。そこでこのワークショップでは、協同学習の特長を生かした評価のためのルーブリックづくりについて、私が現在試行中の取組みを参加者と共有した。ルーブリックは教師が学生の学習到達度を評定する道具ともなるが、学生相互に自分たちの取組みを点検し合う際の道具にもなる。特に、アクティブラーニングで期待される自己評価能力の向上を意図した授業づくりに際し、ルーブリックを使った学生たちの相互評価活動は、その目的に向かって有益と考える。ワークショップでは、協同学習に活かす相互評価について短い講義を交え、参加者に自分たちの学習活動に関する評価ルーブリックを作成していただいた。講義の終わりにそれらを使った相互評価を体験してもらい、その有効性や実施可能性について意見交換した。限られたものであったが、ルーブリックを他の参加者(学習者)と共に作る体験を通じて、多少とも「評定のための評価」から「成長のための評価」へ、評価活動のイメージが変わる機会になったようである。10名ほどの少ない参加者であったが、その場での肯定的な感想だけでなく、ルーブリックに関する講師依頼もあり、有益な時間となったと考える。

キーワード： 協同学習, ルーブリック, 相互評価

#### ⑤ 2030年の初年次教育では何が起こりうるか

担当者： 田中 岳(東京工業大学)  
立石慎治(国立教育政策研究所)

概要： 大きな関心を寄せていた「2018年」が眼前となっている。志願者(入学者)減という現実が、再び減少を始める18歳人口で切実さを増し、2030年には100万人を切るが見込まれている。2019年度からは「専門職大学」と「専門職短期大学」の創設が見通され、2020年度実施の2021年入試は新たな大学入試のスタートである。では、2030年度の初年次教育は一体どのようなものだろうか。大学間のサバイバル競争という課題を一旦保留し、2030年の初年次教育を大学関係者として考えてみようとするのが、本ワークショップのねらいであった。とはいえ、2030年を想像することは簡単ではないため、検討の中心に置いたのは、起こり得る状況(可能性)の吟味であった。2030年に起こりうる将来像を反省的に検討することで、現在を再考する試みである。このプロセスを通じて、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」をあぶり出し、願望や確信でもない2030年への一歩を見出す対話を展開した。その検討内容を全体共有するため、『TodaysMeet』というツールが活用された。なお、プログラムの冒頭には、次のような目標、役割、過程を提示し、構造的なグループワークを進めた。[目標]ワーク

シヨップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。[役割]担当者は会場の相互作用を活性する進行に努め、参加の皆さんには主体的な活動をお願いする。[過程]ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有を行う。

キーワード : 2030年, 組織化(アプローチ), シナリオプランニング, 人口減少社会

## ⑥協同学習の効果を高める演劇的手法の導入

担当者 : 青柳達也(佐賀大学)  
角 和博(佐賀大学)  
安永 悟(久留米大学)

概要 : 学習者が、個人やグループで演劇的空間と時間を創造するためには、学校教育などでそれまでに学んできたさまざまな知識や技能、リテラシーやコンピテンシーを総動員する必要がある。それだけに、演劇的手法を用いることにより、教科ごとに分かれた、分断された知ではなく、実社会で活かされる確かな学びが展開する。一方、教師が学習者を指導する際、演劇的な手法を取り入れることにより、いままで以上に学習者の活動性を高めることができる。例えば、ラウンドロビンを指導するとき、演劇的な手法を考慮して指導し、それを学習者に意識させながら活動させると、学習効果が高められる。今回の2時間のワークショップでは、アイスブレイキングから始めて、身体表現のさまざまな技法がもつ非言語コミュニケーションの効果を体感した。また、演劇的な手法を意識しながら、協同学習の技法をもちいてグループワークを行うことで、協同学習の効果が高まることを体感した。最後に、本ワークショップを体験した参加者の感想・意見・質問などを手がかりに、参加者全員で意見交換の時間を共有した。意見交換では、授業のはじめに演劇的手法で心も身体も温まってから物理や数学などの知識理解の多い講義内容にどのように自然な流れでつないで行くのかという参加者の課題も確認できた。

キーワード : 身体表現, 非言語コミュニケーション, 相手を感じる力, インプロビゼーション, パフォーマティブ・ラーニング

## ⑦ポジティブ心理学を取り入れた初年次教育を考える

担当者 : 長山恵子(金沢工業大学)  
松本かおり(金沢工業大学)

概要 : 教員は授業を通して学生達が生き生きと学業に励むための様々な働きかけを行っている。その働きかけは、授業内容の充実、アクティブラーニングなどの授業運営方法等多岐にわたる。その中で、本ワークショップでは、すでに海外において教育分野への適用例が増えているポジティブ心理学を授業に取り込むことで、学生のウェルビーイング(心身ともに健康な生き方)とレジ

リエンス(立ち直る力+立ち向かう力)を高め、学生生活を充実させるとともに、学習成果へつなげる試みについて、海外と金沢工業大学における事例も交えて紹介した。具体的には、まずポジティブ心理学の考え方を概説し、重要な要素である「ポジティブ感情」、「強み」、「建設的な人間関係」については、その場で演習を実施することで理解を深めて頂いた。最後に、参加者が実際に担当している授業や日常の学生との会話の中に、それらの要素をどう生かすことができるかについて考えてもらい、参加者が互いに自己他己紹介し合い、意見交換をする時間も取り入れた。その後、参加者からの自由な質疑応答を行った。

キーワード : ポジティブ心理学, ポジティブ感情とネガティブ感情, 自分の強みを知る, 他者との良い関係を作る